



召喚軍師のデスゲーム 2

～異世界で、ヒロイン王女を無視して女騎士にキスした俺は！～

α L P H α L I G H T

雪華慧太

Yukihana Keita

アルファライト文庫





ミルダ・リュゼリア

赤い髪の魔女として
知られるハーフエルフ。
アルドリア王国の宮廷魔道
騎士団長を務めている。

ヨアン・アルリード

アンファル王国の王女。
スピードを重視した刀での
戦闘を得意としている。

リーア・リグナ・ アルドリア

アルドリア王国の
第一王女。
妖精のような
美少女だが、
小さい胸に
コンプレックスを
感じている。

ルビア・アルファイラ

アルドリア王国の聖騎士団長。
大陸屈指の剣の腕と美貌から、
アルドリアの薔薇と
呼ばれている。

アイリーネ・フィーリア・ ドラグリア

新生ドラグリア王国の女王。
清楚で優雅な容姿だが、
心の強さは父親譲り。

春宮俊彦 /ハルヒコ

本編の主人公で、
天才的なゲームの
腕の持ち主。
異世界に召喚されて、
滅亡寸前の
アルドリア王国の
軍師となる。

ミルファール・ リュゼリア

外見は妖精の姿だが、
ミルダの母親で上級精霊。
ハルヒコを異世界に召喚
するのに一役買った。

プロローグ

新生ドラグリア王国誕生から、七年前――。

ドラグリアの王都パレストイアは、激しい嵐に見舞われていた。

厚く垂れ込めた鉛のような暗雲を雷鳴が切り裂き、猛烈な雨が大地に降り注いでいる。そんな中、ドラグリアの民達は家の戸を固く閉め、必死に神への祈りを捧げていた。この国の至宝である光が、今まさに失われんとしているのだ。

「おお、神よ！ 主神たる精霊王ゼノンよ！ 我らが太陽であるあのお方を奪わないでください！！」

「どうか、どうか！ アファード陛下のお命をお救いくださいませ！！」
アファード王の敬虔な信徒とも言える人々は目を閉じ、両手を組んで同じ方向を向いている。中には地にひれ伏して涙を流している者もいた。

その方向には、ドラグリアの王宮がある。

息を呑むほど美しい白亜の城は、アフアードがこの国の王となつてから、ドラグリアが栄華を極めてきた証である。

しかし、その宮殿の奥にある国王の寝室は、かつてないほどの悲痛な空気で満ちていた。フェレット神殿の女神ファンリエラの彫像が浮かべる柔らかな微笑みを除いて、集まつた人々の顔色は一樣に暗い。銀製の燭台の上で揺れる蠟燭の炎は、あたかも今まさに燃え尽きようとしている偉大な王の命のともしびのようだった。

その部屋へ、青い髪をした少女が血相を変えて飛び込んで来た。

「陛下……。アフアード陛下、アイリーネ様がいらつしやいましたぞ」

虎のような迫力を持つ老将軍が、王女アイリーネを迎え入れる。その頬は涙に濡れていた。

「お父様！ お父様!!」

ベッドに横たわっているのは、ドラグリアの偉大な王、アフアード・レークス・ドラグリアである。千年に一人とも謳われた賢王であり、武人としてもその名を知らぬ者はないほどの人物だ。

アフアードは不意に訪れた自らの死期を嗅くこともなく、まだ小さな娘であるアイリー



ネの頭を優しく撫でながら、ただ穏やかな表情で臉を閉じている。

その様子を見て、先に王の寝室にいた三人の男女は互いに頷き合々と、無言のまま父娘を残して外へ出た。

そのうちの一人は、ドラグリアの猛将と呼ばれた、アウロス・バロエルサル。

もう一人は、美しいエメラルドグリーンの髪をした獣人族の王女、マフルージェ・エルハイン。

三人目は、ドラグリア始まって以来の天才軍師と誉れ高い、陸軍総帥のアルマン・エツテハイマン公爵。貴公子の名が相応しい銀髪、銀眼の美丈夫である。

アフアードにすがりついて泣く少女の姿を思い出して、アウロスは頭を垂れ低く呻いた。「一体、何の病なのだ……。何故こんなに急に！ アイリーネ様が不憫でなりませぬ！！」

アルマンは、そんなアウロスを突き放すように厳しい口調で言う。

「アウロス將軍、貴君がそのような弱気です。おそろく、もはや陛下の命は数日とたたぬだろう。そうなれば、ドルメルがこの国の王になる」

その言葉に、歴戦の將軍はキツと顔を上げた。

「アルマン様！ 馬鹿な！ あのような男を何故!? そんな事態になればアフアード陛下

が作り上げようとした平和が全て崩れてしまいます！ マフルージェ様も何とか仰ってください！ 獣人族との和平も、ようやくここまで進んだものではありませんか！」

何の前触れもなくアフアード王が倒れたのは、長年紛争が絶えなかつた獣人の王国ジェフルアとドラグリアとの間に和平がなされようとする、まさにその時であった。

マフルージェは、アルマンの手を握り締めて尋ねた。

「アルマン、何故なの？ お父様、いいえ、獣人王ザイアスもドルメルが王になれば二度とドラグリアと交渉などしないわ。貴方だってアイリーネ王女を女王にすると、最初は言っていたじゃない！！」

「もう決まったことだ。アウロス將軍、朝になる前にアイリーネ様を連れてフェレット神殿にゆけ。あそこならばドルメルも手を出せん」

アウロスは、信じられぬものを見るような目でアルマンを問いただした。

「アルマン様、仰ってください。貴方は何かを隠されている！ そうとしか思えません！！」

ところがアルマンは歴戦の將軍に歩み寄り、無情にも静かにこう告げたのだった。「行かねば、アイリーネ様を捕らえねばならん。新王、ドルメル陛下に対して謀反を企てる者としてな」

その瞳には、揺るぎない決意が浮かんでいた。

「馬鹿な……。そんな……」

アウロスは、その言葉にヨロヨロと後ろに下がって膝を突く。

「どうということなの、アルマン！ アファード王と貴方を信じたから、私はお父様を説得してきたのよ！ 納得が出来る説明をして頂戴!!」

アウロスを残し、その場を去ろうとするアルマンに、マフルージェはしつこく食い下がった。

「大図書館ヴェリタスね……。あそこで何があったの？ 貴方がおかしくなったのは、アファード王の病氣の手がかりを探するためにヴェリタスに行つてからよ。一体、あそこで何があったの！」

マフルージェは、何も答えないアルマンに対して剣を抜いた。

帝国の陸軍総帥は、若い獣人の王女を見つめる。

「やめろ、マフルージェ。お前を斬りたくない。ザイアス王にはお前から詫びてくれ。それから一刻も早く、この王都から離れるように説得するのだ。……今すぐに」

その言葉にマフルージェは、剣を仕舞ってアルマンの腕を握り締めた。

「何故なのアルマン！ 獣人族と人間の和平は、アファード王と貴方の夢だったじゃない

い!! どうして……」

マフルージェは、その先の言葉を続けることが出来ず口を閉ざした。美しい瞳に涙を浮かべたまま、アルマンの胸に顔を埋める。

「愛しているの、アルマン……。貴方のことを……。話して頂戴！ 私には隠さずに全部、お願いよ!!」

その時、甲冑を着た兵士が息せき切って彼らの傍へ駆け寄り、大声で報告した。

「アルマン様！ 大変でございます！ 何者かにザイアス王が殺されました！ 今、王都は大混乱でございます、怒り狂う獣人族の兵士と我がドラグリア軍が正面からぶつかっております!!」

美しい獣人の王女の口から悲鳴が漏れた。

「嘘よ……。そんなお父様が……。嘘……」

「マフルージェ!」

その体を自分の方へ抱き寄せようとするアルマンを、マフルージェは振り払った。

「知つてたのね、アルマン!! 貴方……。まさか騙したの？ 私とお父様を!」

彼女の瞳は、悲しみと憎しみに染まっていた。マフルージェは再び剣を抜き、今度は本気でアルマンに切りかかる。

「許さない！ 貴方達を絶対許さない！！」

だがマフルージェの剣は、アルマンには届かなかった。水が流れるような見事な体裁きで彼女の攻撃をかわした後、アルマンが獣人の姫の鳩尾に鋭い拳の一撃を放ったからだ。

アルマンは気を失ったマフルージェを抱きかかえ、その体を兵士に預けて言った。

「皆にはマフルージェ王女は死んだと言え。そして、誰にも見つからぬところに監禁せよ。こうなれば、もはや引くことは出来ん。行くぞ！ 獣人達を鎮圧する」

兵士は頷くと、マフルージェを抱えて王宮の奥へと消えて行つた。

アルマンの横顔に苦渋の色が浮かぶ。

「マフルージェ……。いずれ、お前には全てを話そう。だが今はやらねばならぬことがある。……許せ」

同じ頃、ドラグリア軍の兵士達と獣人族の戦士達の戦いで混乱した王都には怒号が響き渡っていた。

「殺せええ！！ やはり本性を現しおつたわ！！ だから言ったのだ、兄上は間違つておられると！ 殺せ！ あさましい獣人どもを皆殺しにしろ！！」

十頭立ての戦闘用の馬車の上で、脂ぎった巨体を震わせながら男は叫んでいた。

それを諫めるように兵士が声をかける。

「し、しかしドルメール王弟殿下！ ジェフルアの使節団には民間人もいます！ そのような非道は許されぬかと！」

ドルメールは、まるで悪魔のような邪悪な瞳で兵士を睨みつけると、その体めがけて手に持った剣を振り下ろした。

「ぐふううう！！」

兵士の体を鋭い剣が深々と切り裂く。ドルメールは低い声で笑いながら、べつとりと血糊の付いた剣身を分厚い舌で舐め上げた。

「愚か者が！ 非道だと？ 兄上が言う、理想とやらに毒されおつて。力しかないのだ、この世界を制するものは。逆らうものは皆殺しにすればよい。それが、このドラグリアを強くするのだ！！」

血にまみれた兵士は膝を突き、その邪悪な顔を見て呻いた。

「ま、まさか貴方様は……」

「そうだ、獣人どもの王を殺すように命じたのはわしだ。やつらなど、皆殺しにすればよい！ 兄上は、じきに死ぬ。そして、このわしが、王になるのだ」

ドルメールは、激しく戦火を交えるドラグリアとジェフルアの兵士達を眺め、酷薄な笑み

を浮かべる。

「くくく、わしには神がついておるのだ。このドラグリアの神がな」

その時、凄まじい雷鳴が轟き、恐ろしい稲妻がドラグリア城に落ちた。次の瞬間、宮殿の鐘がけたたましく鳴り響く。悲痛な叫び声が、王宮の各所で上がった。ドラグリアの民から愛された賢王アフアードが、この世を去ったのである。

「ふは！ ふははははは！！ この鐘の音、あの稲光！ 全てはわしが見た夢のとおりだ。あの夢に現れた黒き神の予言！ 兄上ではない！ このわしが、この地上の覇者となるのだ！！」

間もなく宮殿からドルメールのもとへ遣いの者がやって来た。それはまさにドラグリアの国王であるアフアードの崩御の知らせだった。

アフアード王の死を告げる鐘が鳴り止まぬ中、ドルメールは王都を逃げ惑う獣人達を見つけては、手当たり次第に容赦なく手にかけていく。

「お、お助けください！ せめて、この子だけでも！！」

幼子を抱える獣人の女が、ドルメールの目の前で命乞いをした。

「ほう？ それは良い心がけだな、女よ」

女は悪魔のような男の前で、瞳に一縷の希望を宿らせる。

「で、では……！ お助けくださるのですか……！ ありがとうございます！ ありがとうございます！！」

ドルメールは懇願する女の姿を見て、邪悪に笑った。それから醜く肥え太った指先で、泣き叫ぶ幼子をすつと指さす。

「ふは！ ふははは！ この虫けらが！ わしは楽しみなのだ！ 貴様のような心根の優しい女の希望を踏みじめるのがな！！ おい、その子供から殺せ！ 女の目の前でな！！」

常軌を逸した非道な言葉に、周りの兵士達も思わず凍りつく。だが、兵士達はドルメールの血走った瞳に恐怖を感じ、その幼子に剣を向けた。

獣人の女は、恨みに染まった目で彼らを睨みつける。

「呪われろ！！ この悪魔ども！！ お前達は皆、永遠に呪われよ！！」

ドルメールは足下に跪く女の顔を、何の躊躇いもなく蹴り飛ばして哄笑した。

「ふはははは！ 呪われよ、だと？ 黙れ！ この薄汚れた獣が。やれ、殺せ！！」

再び稲光が閃いた時、凄まじい咆哮がその場に響いた。

「グオオオオオオーン！！」

まるで小山のような人影が、ドルメールに向かって走って来た。その行方を阻もうと、立ち塞がるドラグリアの屈強な兵士達が、成す術なく次々となぎ倒されていく。

「「な、なんだあれは!!」」

兵士達は、その異形の姿に怯えた。

鋼のような肉体と野性的な瞳。赤いたてがみを思わせる頭髪。その手首には獣人族の戦士の証である入れ墨が刻まれている。それは獣人族最強の軍団、獣牙旅団の紋章だった。

ドルメールはその男の正体を知って、馬車から降りると油断なく剣を構えた。

「ぐぬうー! 貴様! バルダス・デュカオン!!」

ドルメールの言葉に、その場にいる兵士達は息を呑む。

「赤き獅子バルダス・デュカオン、獣人族最強の戦士か!!」

鍛え上げられた体には無数の刀傷がある。それは、ここまで辿り着く間に討ち倒してきたドラグリアの兵達の数物語っていた。

ドルメールの足元に倒れている獣人の母子を労わるような目で一瞥し、バルダスは再び凄まじい咆哮を放った。

「ドルメール!! この悪魔め! 貴様のような男に生きる資格などない!!」

そう叫ぶと、バルダスは赤い稲妻のようにドルメールに襲い掛かる。

「ひいひい!! 神よ!!」

自分を守る数名の兵士達を一瞬で切り裂いて迫る獣人族最強の戦士に、思わずドルメー

ルは尻もちをついた。

そしてその爪が、邪悪な男のドス黒く濁った内臓をえぐり出そうとした瞬間――。

ギイイイン!!

バルダスの無敗の牙が弾かれた。

「貴様……! なぜだ……!」

バルダスは吠えるように言った。

銀色の瞳、そして銀色に靡く髪。自分の攻撃を防いだ神技に等しい双剣の抜刀術。

アルマン・エツハイマンだった。

「……アルマン」

赤き獅子と呼ばれる男は唸った。

「なぜだ! なぜだアルマン!! 俺は、貴様とアファード王を信じた! 貴様を友だと信じて、マフルージェ様を任せた。なのに、なぜ裏切るのだ……。なぜ、こんな形で」

アルマンは、剣を構えて低く言った。

「今は去れ! バルダス、お前を殺したくない」

ドラグリアの兵士達が、ようやく我に返りバルダスを取り囲む。

バルダスは血の涙を流していた。それから気を失い地に倒れている獣人族の母子を抱き

かかえる。

「アルマン、貴様を殺す！ いつの日か、このドラグリアを必ず滅ぼす！ この赤き獅子バルダス・デユカオーンの名に懸けてな!!」

そして、天に向かって一声咆哮すると物凄い勢いで跳躍した。その姿は一瞬にして雷鳴の中に消えて見えなくなる。

「アルマン！ なぜ奴を逃がした！ 貴様!!」

ドルメールのその言葉に、アルマンは静かに答えた。

「獣人族最強と呼ばれたあの男。獣化と呼ばれる真の力を解放すれば、この世で互角にやりあえるのはアフアード陛下のみ。死にたいのなら、王弟殿下自らで追われるがよろしからう」

「ぐぬううう!!」

ドルメールは怒りの形相を浮かべたものの、すぐに不敵な笑みに取って代わる。

「くくく、まあよい。兄上はもうこの世におらぬ。貴様はこれからこのわしの為に、存分に働いてもらうのだからな」

一夜明け、アフアード王の葬儀が盛大に行われた。

棺の中に眠るアフアード王の姿を見て、多くの者が涙を流した。だが、弔問に訪れた参列者の中に愛娘アイリーネ王女の姿はなかった。彼女は、昨夜のうちにアウロス將軍の手でフェレット神殿に発つていたからだ。

そして、人々はドルメールの側に控える帝国元帥の姿を目にして、恐るべき状況が現実のものとなり、次の王が誰となるのかを悟ったのであった。

新しいドラグリア王としての即位が終わると、ドルメールは何者かに導かれるかのように帝都の地下へ向かった。その隣にはアルマンの姿もある。

「ふはは、よいなアルマンよ。神はわしを選んだのだ。賢王と呼ばれ、皆に愛された我が兄アフアードではなく、このわしをな」

その言葉には、長年優れた兄と比較をされ続けた王弟の嫉妬や憎しみが込められている。アルマンは無言でドルメールの後に続き、地下への階段を進んで行く。

まるで地の底に続くような長い階段の奥には、神殿があった。巨大な白い柱が、その威容を誇っている。

そこには神官の姿をした女が待っていた。黄金の髪と黄金の瞳。特徴的な長い耳は、彼女が人間とは異なる種族であることを示している。

「お前は、エルフか？　なぜ、このような場所にエルフがいる。あのお方は何処だ？　わしは、夢に見た黒い炎の神に導かれ、ここにやって来たのだ！」

ドルメルは、その女の人知を超えた美しさに、情欲のこもった無遠慮な目を向ける。ハーフエルフではない。頭のとっぺんから足の先まで、その肢体を舐めるような目で往復させれば、純粹種のエルフであることは一目瞭然であった。

女は穢れたものに触れたような不快感を覚えたが、自らに課せられた役目を果たすため、冷然とした態度を崩さぬまま深く頭を下げる。

「わたくしの名は、ミレティス。導かれし者を『扉』に案内するのが我が務め」

エルフの女はそう告げ、神殿の奥にドルメルとアルマンを迎え入れた。

太古の昔より存在するドラグリアの地下には、ひんやりと湿った空気が流れており、それはこの洞窟が、あたかも未知なる暗黒の地へ続いていることを証明しているかのようだった。

「こ、これは!!」

ドルメルは、思わず呟いた。

それは神殿の最深部に存在していた。

ドラグリア王宮の地下に、何故このようなものがあるのか？

——いや違う。

それが最初からそこにあり、その上に王宮が作られたのだ。そうドルメルは本能的に悟った。

ドラグリア王宮自体が、これを隠すための目眩ましに過ぎぬかのような錯覚すら覚えさせる。

それはなんと、巨大な扉だった。古より伝え聞く竜すらも通り抜けることが出来るかもしれない。しかもその扉が、信じられぬほどの太古からこの場所に存在していることは、扉の表面に刻まれた無数の古代文字と、王族のドルメルですら見たこともないほど精巧な彫刻からも分かる。

ドルメルは、狂人が叫ぶかのごとく言った。

「見たぞ！　わしはこれと同じ扉を夢で！　そして、わしは見た！　黒い炎の神を！　そのお方の導きで、わしは王となったのだ!!」

その言葉が合図になったかのように、エルフの女が静かに詠唱を始めた。すると、扉の前に小さな黒い炎が浮かび上がる。

ドルメルは目を睜り、恐れをなして後ずさった。

黒い炎は次第に大きくなり、不気味な人影を作り上げていく。

ドルメールはその場に跪いた。

「おお！ おお！！ 我が神よ！！ どうかこのしもべに、我が神の名をお聞かせください！」
 黒い炎の人影がゆらりと揺れ、頭部に相当する場所がいやらしく三日月状に割けた。
 『ドルメールよ、我が名はテネブラエ。智の神にして闇司る神。我こそがそなたの主、よく覚えておくがいい』

人影は、ゆっくりと揺らめきながら歩いて来る。見ようによつては若く美しい男に見えた。

『ドラグリアの新しき王よ。貴様の欲望のままに殺せ。そして蹂躪せよ。そなたは、私の剣となりて、この地を憎しみて満たすのだ。我が命に従う限り、我はそなたに力を貸してやろう』

ドルメールはひれ伏したまま、黒い炎の人影に答えた。

「我が神よ！ このドルメール、必ずや貴方様の御心のままに！」

ドルメールは、次なる有難い言葉を賜ろうと、その場に蹲っていた。

ところが、恐るべき黒い炎の人影から発せられた言葉は、ドルメールの期待を裏切るものだった。

『ドルメールよ、もう行け。側に仕える、その男をここに残してな』

テネブラエの言葉に、ドルメールは血走った目でアルマンを睨む。

「な、なにゆえです、黒き神よ！ テネブラエ様が、お選びくださったのはこの私！ アルマンなどに、一体、何の話が!?」

だが次の瞬間、黒い炎がしなる鞭のように大きく揺らめくと、その炎の一部が空気を切り裂いてドルメールの肥満した肉体に矢のごとく突き刺さった。

「ぐううおおお!!」

ドルメールは、焼けるような苦痛を隠そうとせず、惨めな豚を思わせる姿で地面を転げ回る。

『二度は言わぬ。私の命に従え、我がしもべよ』

「わ、我が神よ！ お許しを!!!」

その体から黒い炎が消える。

ドルメールは怒りと嫉妬のこもった目でアルマンを睨むと、這う這うの体でその場を去って行った。

ドルメールの姿が消えた後、アルマンと黒い炎の人影は、暫く無言のまま対峙していた。
 『どうした、アルマンよ。そなたは我に忠誠を誓わぬのか？ 神たるこの私に』

「……神だと？ 笑わせる。貴様は本を正せば、ただのエルフではないか。神などではない」

黒い炎の人影は、それを聞いて高らかに笑う。

「お前はアフアード王の懐刀とも呼ぶべき男。我らのことも、無論、知っておろうな」

アルマンの銀の瞳が、黒い炎を射抜いた。

「かつてこの場に集いし五人のハイエルフの一人、テネブラエ。千年前、貴様らがここで犯した罪を、私が知らぬとでも思っているのか」

アルマンのその言葉に、黒い炎が上下に揺れた。笑っているのだ。

「ふふ、ふははは！ そうか、知っているのだな。貴様は、真実を。真実の塔、大図書館ヴェリタスか？ やはりお前は、邪悪なことしか能がないあの男とは異なる人間らしい。どうだ、我が下僕となれば、貴様の望みは全て叶えてくれようぞ」

「黙れ！ 偽りの神が！！ 私は、あの方を奪った貴様を殺す為にここに来たのだ！」

恐るべき速さであった。その言葉を発するや否や、アルマンは問答無用で黒い炎の人影に向かって踏み込んでいた。両腕にはそれぞれ剣が握られている。

双剣の抜刀術。

大陸随一と呼ばれたアフアード王の剣と真っ向から打ち合えたのは、バルダスを除けば

アルマンだけだと言われている。それはまさに、神技と呼べる領域のものであろう。

「テネブラエ様！！」

エルフの女がそう叫んだ時、黒い炎は両断されていた。

だが、一瞬掻き消えた炎は何事もなかったかのように、ゆっくりとまた人影の姿となる。

『無駄だ、これは私の影に過ぎん。くくく、それに貴様は我に逆らうことは出来ん。そうであろう？ アフアード王よ』

テネブラエの予想外の言葉に、流石の銀髪の貴公子の顔にも動揺が走った。

「なに！ 貴様……。何を言っている？」

アルマンは背後を振り返る。異様な気配を感じたのだ。

そして自らの視線の先にいる人物を見て、アルマンは全身から血の気が失せていくのを感じた。

「そ、そんな馬鹿な！ このようなことがあるはずがない！！ 私は見たのだ……。確かにあのお方が、亡くなられるところを」

見事な黄金の髪、そして堂々たる体躯。神々に愛されたことが一目で分かる美しい容貌。それは、紛れもなく王者の中の王者と呼ばれた男である。

「アフアード様……。い、一体これは！」

呆然と呟くアルマンを嘲笑うかのように、黒い炎がゆらゆらと不気味に揺れた。

『いざれ罪が聞く。千年前の、あの日のようにな。アルマンよ、貴様が我に協力するといふのなら……。その時、地上の王として君臨するのはアファード・レークス・ドラグリア。貴様が敬愛して止まぬ、この男になるであろう』

その声はいつまでも暗い地下の洞窟の奥に響き、やがてアルマンを嘲弄する戦慄すべき哄笑へと変わっていった。



その頃、王都が見渡せる丘の上で一人の男がドラグリア王宮を眺めていた。精悍な顔をした長身で黒髪の方である。

引き締まった体を包む鮮やかな紅の衣装に、濃い赤のマント、腰からは剣というよりは刀に似た得物を提げている。

その肩には白い動物が乗っていた。

誰かがその姿を見たのならば、有りえないと言っだろう。

愛らしく大きな瞳と白い体毛に覆われた翼、それはまだ余りにも小さな存在だったが、

紛れもなく遙か昔に絶滅したはずの竜という生き物であった。

その小さな白い生き物は男を見上げて口を開く。

「ねえ、リュオン。よかったの？ ああアルマンっていう人に力を貸してあげなくても。アファード王は選ばれし者、再び守護者を倒せる者がいるとしたら、アファード王だってリュオンも言っただじやない？」

まるで鈴の音のような声でそう言っただ小さな白竜の頭を撫でると、リュオンと呼ばれた男は笑った。

「テアラ、気に入ったのか？ ああ男が」

小さな竜は頬を膨らませてリュオンを睨む。

「別に！ リュオン以外の男なんてどうでもいいし！ でも私達の話聞いて、とても悲しい目をしてた。ヴェリタスでアルマンと会ったのも運命だしたら、少しぐらい手を貸してあげてもいいんじゃないかって……」

テアラと呼ばれた小さな竜の言葉に、リュオンは遠く空を見上げて答えた。

「残念だが、俺の使命とは何の関わりもない。だがお前が言うように、もし運命だとしたらいざれまた会うことになるだろう。それだけの話だ」

そう言うリュオンは踵を返して歩き始める。

夕闇が周りを包んでいく中、男の瞳は緋色に輝いていた。

第一話 アンファルの黒い狼

いい香りがする。

柔らかく、俺の鼻腔をくすぐる髪感触。

俺は思わずその匂いの正体を抱き締めて、胸一杯にすうつと息を吸い込んだ。美しい花のような香り、すべすべとした滑らかな質感。少し女の汗の匂いも混ざっているだろうか。

「ハルヒコ様、駄目です……。そんなに匂いを嗅いだら……。恥ずかしいです」

困惑したような、それでいて甘えた声が、俺の腕の中から聞こえた。

(……ん?)

どうせリーアが、朝になって俺を起こしにでも来たのだろう。

「おいリーア、変な起こし方はやめろ。まるで俺があぶない趣味を持った変態野郎みたいじゃないか!」

だが俺の予想は外れた。美しく青い髪をベッドの上に広げながら、清楚な顔を真っ赤に

染めた少女が俺の腕の中にいる。

そして、上目遣いでジツトリと俺を見つめて呟いた。

「やっぱり、リーアさんの言ったとおりです」

「うお!!」

俺は叫んだ。

目の前にいるのは、アイリーネ女王じゃないか。

「なっ!! なんてこんな所にいるんだ!? アイリーネ、ここは俺の寝室だぞ!!」

思い出せ……。

まさか俺が夜這いをした、なんてことはないよな?

女王にそんな無礼を働けば、ルビアとアウロスに殺されかねない。

いや、アウロスの心配をする必要はないか。既成事実を突きつけられて、婚約させられるかもしれないが。

アイリーネも、明らかに困惑した顔で俺を見ている。

「あの、私も分からなくて。さっき目が覚めたらここに……。そしたら勇者様がギュッと私の頭を……」

誰だ、俺を異にかけようとしている奴は。

俺は可愛らしい顔で俺を見つめる女王に向かって言った。正確に言えば、アイリーネの中にいる存在に向かってなのだが。

こんなことが出来る奴は一人しかない。

「お前かファンリエラ！ 娘に何をさせてるんだ!!」

目の前の少女の雰囲気（ふんいき）が、がらりと変わる。

「ふふっ」と妖艶（ようえん）な笑みを浮かべ、からかうような瞳で俺に腕（かち）を絡めてくる。それは紛れもなくフェレット神殿の主にして大地の女神ファンリエラだった。

フェレット神殿の巫女（みこ）ノルリアナの娘であるアイリーネの体を一時的に支配していたのだろう。

アイリーネには母と同じように巫女（みこ）の才能があると言っていたからな。

「よいではないか。いざれお前はアイリーネの夫になるのだ。わらわが決めたのだから、文句はあるまい?」

「ないわけないだろ！ アイリーネは新生ドラグリア王国の女王なんだからな。こんなところを誰かに見られたら、大変なことになるぞ」

女神と呼ばれる上級精霊は俺の首に手をまわして、悪戯（いたずら）つぽく笑った。その視線は俺の背中（せなか）の先を向いている。

「ふふっ、もうとっくに見られておるようじゃが、よいのか?」

俺は、殺気（ころき）を感じて後ろを振り返った。

そこには、俺の部屋の扉を開けたまま杳然と立ち尽くしている二人の人影があった。

アルドリア王国の王女リーアと聖騎士団長ルビアである。

「お兄ちゃん……。何してるの……。死にたいの?」

最近のリーアは容赦がない。ベッドの上で抱き合う俺とアイリーネを目撃し、可愛らしい顔を引きつけている。

「リーア様、いつそいつを皆の前で焼き殺しましょう。処刑（しよけい）するべきです!!」

ルビアは、剣（きん）を鞘（さや）に収めたままこちらを睨（にら）んでいる。あつさりと殺すのでは、もはや気が済まないらしい。

上級精霊のミルファールが妖精の姿で俺の体から飛び出し、リーアの頭の上に止まった。

「リーアさん！ ルビアさん！ やめてください!! ハルヒコさんは、アイリーネさんの髪の毛（かみ）を嗅（か）いでいただけです！ わたしが見てましたから、間違いありません!!」

（ああ……。お前、絶対俺を殺す気だな）

大体、俺にはそんな趣味はない、誤解（ごかい）にも程（ほど）があるというものだ。

「リーア様……。やはりこの男、今すぐここで始末（しまつ）します。ご許可をください!!」

「おお、わらわは永遠の大地の女神麗しのファンリエラと呼ばれし者。死に瀕したるこの哀れな者を、わらわの力にて回復させん。ホーリーヒール!!」

(おい！ 今、死に瀕したるって言わなかったか?)

相変わらず長い詠唱だが、俺を回復させたのはファンリエラである。

「まったく、わらわが止めねば本気で殺すつもりだったのか？ アルドリアの薔薇よ」

リーアとルビアが固まっている。

それはそうだろう。女神と呼ばれる存在が、目の前で俺を治療しているのだから。

「お兄ちゃん……。この人って本物の女神様？ でもアイリーネさんは？」

「ハルヒコ、お前！ まさかアイリーネ様ではなく女神様にまで！ このケダモノめ!!」

ルビアはまた剣を抜きかける。

「そんな訳があるか！ 説明してくれ、ファンリエラ!!」

ファンリエラは肩をすくめる。

「わらわがこの男を気に入ったからじゃ、それでよからう!」

「お前がよくても、俺が困るんだよ!!」

ファンリエラは不満そうに頬を膨らませつつ、しぶしぶと説明を始める。

全てを話し終えると、ミルファールがリーアの手のひらの上に乗った。

リーアは混乱したように俺を見つめる。

「えっと……、女神様が本当は精霊で、それで妖精さんの叔母様で……。えっとアイリーネさんのお母さんで、でもノルンリアナさんもお母さんで、それで今はアイリーネさんの中において……。えっと……」

「まあ、そういう訳じゃ。暫くはそなた達と同行させてもらおうぞ。訳あって戦いに手出しは出来ぬが、アイリーネの夫になる男に死なれでもしたら困る。それではアイリーネを頼むぞ、ハルヒコ」

言いたいことを言ってしまうと、ファンリエラはアイリーネの体の支配を解いた。

全身を覆うような妖艶な雰囲気が消え、瞳の色に清楚な色合いが戻る。アイリーネの中では、さっき俺としていた会話で記憶がストップしているはずだ。大きな瞳を震わせて、思いつめた表情を浮かべている。

(……嫌な予感がするな)

そして、アイリーネは言った。

「いいんです！ 私は勇者様に少しぐらい変な趣味があっても……。私の髪でご満足いただけるなら！ ど、どうぞ!!!」

アイリーネは顔を真っ赤にして、俺に可愛らしく頭を突き出した。

「どうぞって……。私のお兄ちゃんに何してるんですか？ アイリーネさん！」

リーアがアイリーネを睨んでいる。

「え!? え!! ……なんでリーアさんが？ ルビアさんも!!」

ファンリエラに体を支配されていた間の記憶がすっかり飛んでいるアイリーネは、今気づいたとばかりに驚きの声を上げた。

リーアが当然の権利だという顔で、極めて自然な動作で俺の膝の上に乗る。それからぷっくりと頬を膨らませながら俺に強く主張した。

「これからは、どうしてもお兄ちゃんがそうしたい時は、リーアに相談してください！」

（いや、リーア……。それが、一番駄目だろ）

アイリーネが新生ドラグリア王国の女王になって一週間。

俺達は今、フェレット神殿の東に位置する城塞都市ラハンに陣を構えていた。この辺りではフェレットに次ぐ拠点であり、周囲に張り巡らされた城壁が敵の侵入や攻撃を容易ならざるものとしている。

俺達は、戴冠式が終わるや否や行動を開始した。

まず、伝令を各地に走らせ、フェレット周辺の都市の制圧に奔走した。

この土地は、もともと大地の女神ファンリエラへの信仰心の厚い民が多く暮らしている。したがって、アファード王の娘であるアイリーネを支持する者も少なくなく、この地域をいかに早く手中に収めるかが、新生ドラグリア王国の足場を固める上で最も重要だった。加えて俺がことさらに併合を急いだのには、もう一つ理由がある。

リーアとのある約束を守るためだ。

（リーアに、俺が出来ることはやると約束したからな。そろそろ向こうも動き出しているところだが）

「お兄ちゃん？」

「ハルヒコ！ こら、どこに行く!? 本当に反省してるのか？ まだ話が終わってないぞ!!」

リーアとルビアの説教から逃れる目的もあるが、俺はアンファルの王女であるヨアンとの約束の時刻を思い出し、自分の部屋のテラスからラハンの城壁を見渡した。

跳ね橋を上げた城門の辺りにいる兵士達の間で、何やら騒ぎが起こっているらしい。

俺は背後を振り返り、リーアの髪の毛をくしゃくしゃと撫でた。

「どうやら、来たみたいだな」

「え？ お兄ちゃん、来たって誰が？」

俺の言葉に、リーアが不思議そうに首を傾げる。

丁度その時、衛兵が俺の部屋に駆け込んで来た。

「勇者様！ 城門に女が現われ、小競り合いになっているようです。『ヨアンが来た！』と、リーア王女殿下か、勇者様に伝えてくれれば分かると言っているのです——」

衛兵の言葉を聞いた瞬間に、リーアは駆け出していた。

「ヨアンさん！！」

「おい、待てよリーア。そんなに慌てなくて、ヨアンは逃げやしないさ」

俺の言葉に足を止めてリーアは笑顔になる。

「だって！ きゃっ！！」

ひどく慌てたからだろう。躓いて転びそうになるリーアを俺は後ろから抱きとめると、

そのまま彼女の体を横に抱えて部屋を飛び出す。

また転びそうになって怪我でもされてはかなわない。

「お、お兄ちゃん！」

リーアが顔を真っ赤にして俺を見ている。

さすがに元の世界では経験できない、貴重なリアルお姫様だった。

「ちょっと酷いじゃないですか。置いていかなくてください！ 大体リーアさんだけ、ずるいです！！」

アイリーネが非難の声を上げる。

ルビアが苦笑し、アイリーネの手を引いて後ろから追いかけて来た。

その姿を見て、リーアは可愛らしい顔で勝ち誇っている。

「当然です、アイリーネさん！ お兄ちゃんは、私のお兄ちゃんなんですから——」

ラハンに立ち並ぶ幾つもの建物の間を駆け抜けて城門に辿り着くと、騒ぎを聞きつけて集まって来た衛兵達がいた。跳ね橋は上げられ、堀の向こうにいる馬に乗った戦士達と睨み合いが続いている。

無理もないだろう。アルースの戦いの最中で仲間になったヨアンのことを知らない兵士も多い。

リーアは、その先頭にヨアンの姿を発見して衛兵に訴えた。

「ヨアンさんです！ お願い、橋を下ろして——」

突然現れた王女の姿に、城門を守っていた衛兵達が驚いている。

俺が後押しするように頷くと、衛兵達が慌てて跳ね橋を下ろした。

その橋を渡って一人の女戦士が、こちらに馬で駆けて来る。

「リーア！ ハルヒコ！！」

ヨアンは、俺達の前で馬から降りてリーアを抱き締める。

「おかえりなさい！ ヨアンさん！！」

ヨアンは、まるで妹にするように優しく髪を撫ながら俺を見た。

「ハルヒコ。数日前、ドラグリア軍がアンファルから一斉に引いていった。あれは、お前が何かしたのだろうか？」

俺は、軽く肩をすくめる。

「大したことはしていないさ。ただ、ここまで予定より早く進軍しただけだ。多少のリスクはあったが、リーアと約束をしていたからな」

新生ドラグリア軍がフェレット周辺を一気に制圧したとなれば、よほどの馬鹿でない限り、敵方はまず次の戦いに備えて戦力の集中に専念するだろう。

それと同時に、多くの都市で反ドルメル派が蜂起したという情報を流す。そうなければ一度、安全な場所まで兵を戻して守りを固めるといった策を取ってくるに違いない。

いつ誰が裏切るかもしれない場所に兵を分散するなど愚の骨頂だ。各個挟撃を受けて壊滅するだけである。

アルースであればどの敗北をした以上、ドルメルが次に指名する指揮官は一人しかい

ない。

帝国随一を誇る軍略家、アルマン・エツェハイマン公爵だ。

アルドリアの地下書庫で調べた限りの情報では、愚かな自滅を選ぶ人物ではない。

「とにかく礼を言う、ハルヒコ」

それからヨアンは後ろを振り返り、戦士達の先頭に立つ壮年の男に声をかけた。

「父上！ この男が私が申し上げた男です」

いかにも歴戦の武人といった男が俺の前に膝を突く。

「そなたがアルドリアの勇者、ハルヒコ殿か！ 娘のヨアンを、そして我がアンファルを解放してくれたのは全てそなたの力と聞く。我らアンファルの民は皆、そなたとアイリーネ女王の為に命を捧げよう！」

男の後ろには、おそらく三千はいるであろう、アンファル独特の刀のような剣を装備した騎馬武者達が控えていた。彼らの姿は、どことなく日本の侍に似ている。騎馬武者達は皆、馬を降りて俺に敬意を表した。

……ただ一人を除いては。

「みんな騙されるな！ 俺は信じゃない！ こいつらだって同じだ！ ドルメルを倒すために姉上を利用してるだけだ！！」

立ち読みサンプル はここまで

そう叫んだのは十六、七歳ぐらいの青年だった。顔立ちが少しヨアンに似ている。

ヨアンが、その青年に走り寄って肩を掴んだ。

「どういうつもりだシロウ！ お前は姉の言うことが信じられぬのか！！ この男は信頼できる男だ！！」

「嘘だ！ だったら何故、また姉上を戦わせる！ ドルメールと同じじゃないか！」

シロウと呼ばれた青年は、姉のヨアンの手を振り切って俺を睨みつける。それから側にいるアンファルの兵士の一人に剣を渡すように命じると、それを握り俺の目の前に突き出して凄んだ。

「アルドリアの勇者だか何だか知らないが、男なら俺と剣で勝負しろ！！ 俺に勝ったらお前を認めてやる！！」

俺は、シロウと呼ばれた青年が受け取りを強要する剣を手取る。

（へえ、これはまるで日本刀だな）

黒く美しい鞘の形は、まさしく日本刀のそれである。

このやり取りを見て、アンファルの武者達がどよめいた。

「おお！ 勇者殿が、シロウ様からの決闘の申し出を受けられたぞ！！」

ヨアンが俺の肩を掴んで叫んだ。

「馬鹿！ ハルヒコ、何故受け取る！！ アンファルの男は、決闘を申し出た相手が己の剣を受け取れば、相手を倒すか自分が倒れるまで戦わなくてはならない。それはたとえ、どちらかが死んだとしてもな！」

俺は軽く肩をすくめた。あんなに鬼気迫る形相で剣を突き出していたので、嫌な予感を感じたのだが。まあ、もはや後の祭りか。

「お兄ちゃん！」

リーアが心配そうに俺を見上げている。俺はその銀色の髪を撫でた。

「心配するな、リーア。何とかなるさ」

どうせ受け取らなければ、こいつは納得しないだろう。なら結局、同じことだ。口で言っても駄目なら力で示すしかない。

「舐めるなよ、俺のことを！ 俺には半分獣人族の血が混ざっている。俺の動きを見切れるのは、アンファルでも父上と姉上ぐらいだ！」

少し上がった耳と精悍な瞳。

言われてみると、確かに普通の人間とは違う。

（なるほどな。アルドリアの地下書庫で読んだ本で存在だけは知っていたが、これが獣人ってやつか？）